

24
16

寒燈夜話 小栗外傳卷之十四

北野芳

東都 絳山戲編

第廿四編

勇威龍を走して亡鏡を復さ
仁惠士を憐みて旧宝を見命

小栗助重は將軍家より一色詮秀を討つるに御教書より清人と闘ふ
主従京師より義量と薙去より世間の人が清水坂踏のふいふ物
警くあつた便りき人ゆり皆く世の動靜を窺ひし我持公のほかに
普道院の門主我圓傍に思ふゆりて義宣と号し多し征夷將軍を成す

世の世に徳みなりはらふ我れは京都鎌倉に中不極なるの
世間再び不詳溢るるふきり柳京後金確執の監鯨にふらぬたふ
我持公去る應永三十年の二月征夷大將軍に職を辞し自ら自願を乞ふ

箕裘を譲り。四月上旬には藩師あり。世に連日静し。天年及保人と思はし
 多岐中同三十二年二月廿七日。我量公世を早や。多岐公。いさ。は。齡十九歳
 道号ハ翠山法名ハ道基長徒院殿と。り。僅に食むは。櫛の糸。綻ひ
 出。つ。て。は。し。て。忽ち。一。朝。の。風。散。矢。多。く。天。下。の。憂。ひ。こ。も。極。り。
 さ。う。う。暗。夜。に。燈。火。を。打。消。し。は。公。地。を。と。れ。り。父。我。持。公。の。は。僕。き。す。る。に
 か。う。ら。は。猶。ら。外。に。世。嗣。を。ま。た。さ。き。公。達。も。在。り。ま。ら。ば。公。裡。に。か。て
 あり。ね。は。物。思。ひ。し。代。を。加。り。め。を。君。を。く。て。い。う。て。天。下。を。治。む。ま。と。お。ん。ま。ら。お
 は。け。先。祖。の。氏。公。の。定。も。お。ま。き。ま。ら。も。あ。れ。り。源。倉。左。馬。頭。殿。の。は。公。連
 賢。王。と。の。と。名。子。に。し。天。下。の。權。政。を。讓。り。ま。ら。ん。う。と。信。領。公。の。筆。を。は。内。評
 の。り。な。れ。り。後。領。畠。山。尾。澄。満。家。と。ど。り。山。名。赤。松。以。下。の。諸。臣。等。此。年
 然。る。と。し。く。も。な。く。危。角。月。日。を。は。ら。ち。我。持。公。は。物。思。ひ。の。積。り。も。は。地

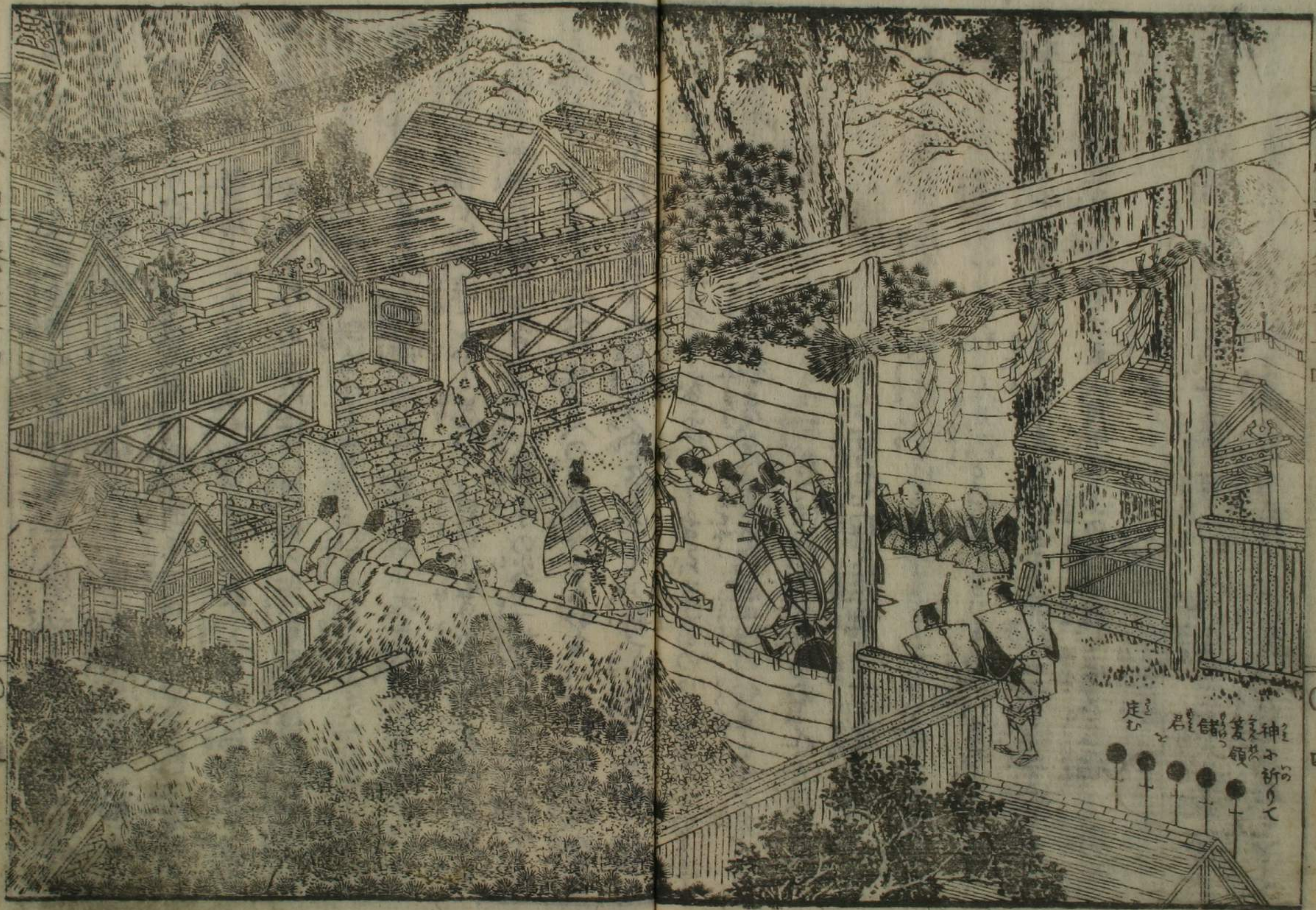
例。あ。り。と。て。父。へ。う。が。正。長。元。年。正。月。廿。六。日。ま。き。り。小。重。ら。せ。り。し。今。と。や
 今。世。の。教。を。少。く。ぞ。と。入。り。同。十。七。日。後。領。畠。山。満。家。石。清水。よ。と。あ。れ。り。丹。城。の
 勤。行。を。い。じ。や。ま。れ。る。は。い。今。前。の。軍。を。我。持。公。の。病。の。と。危。う。く。一。朝。の。毒。と。も
 流。さ。せ。り。天。下。を。み。ま。り。万。民。の。嘆。を。我。許。を。や。僕。等。不。肖。な。り。と。の
 り。と。後。領。の。職。を。し。て。い。は。足。を。思。ま。り。ん。や。柳。菊。社。の。源。家。意。後。ま。在。り。せ。り
 仰。顔。く。愛。敬。を。た。れ。り。今。と。や。中。外。の。二。人。の。公。の。ら。ち。何。と。う。君。と。し。然。る
 る。と。ん。只。神。多。く。ま。り。し。多。ひ。世。嗣。の。公。を。定。め。天。下。の。人。を。救。ひ。ま。ら。せ。り。
 二。人。の。君。と。り。前。大。樹。の。公。舎。青。蓮。院。の。門。主。今。入。り。徳。倉。殿。の。公。達
 賢。王。九。殿。之。此。二。方。の。名。及。記。し。神。箭。を。捧。ぎ。り。も。その。宜。ま。り。は。し。り。人。を。是。と
 心。圖。と。し。丹。城。を。と。り。て。心。圖。を。取。り。三。度。及。及。ふ。る。我。圓。僧。正。の。は。名
 の。を。は。ら。け。る。足。は。く。も。神。を。あ。け。ぬ。と。ま。り。下。向。柳。登。り。還。り。君。を

下ゆ。徳老臣ハ斯と告る。ふこも神意の指ところ。いつて疑ふべきういと評定
 これ一変をかゆ。如く羽之目午刻前ハ軍を打ち。此年世田あき。逆法も
 同之月十一日。我が圓修心を還俗せしめたり。義宣公と号し。若お軍
 義持公ハ同母の妹。言身之幼女。青蓮院門主の室。今も出家し。も
 義圓と号し。なり。天台四明の法水と汲て。自解公余の妙理を定。以止観二
 諦の教門を開きて。法法実相の深意も。達し内外二典も通し。持歌及
 小賢。一山の明師となり。多之れは。月がかり。れが帝がきり。好く信敬ましくて。
 大傍のふ任。准后の宣旨。さかろり。門主の烈。よ入く。天台座主と成。多し。え。
 俗性とし。傍位とし。今還俗ありて。天下の禮を執。多し。何の不足。うおし。
 手と之れ。やうて。陳座の宣下あり。小除目。もろれ。從五位下。ハ。左馬路。ハ。
 任せ。は。今年三十。才。ハ。斯波左兵衛佐。義淳。再ハ。後。願。は。任。せ。は。京。都。

り。う。権。ハ。徳。お。わ。の。く。お。び。と。る。と。永。享。元。年。三。月。十。五。日。ハ。衣。着。左。近。
 衛。中。將。任。し。征。夷。大。將。軍。ハ。補。せ。られ。四。名。を。受。教。と。改。め。多。ハ。從。三。位。下。叙。せ。
 ら。は。ハ。備。出。仕。の。輩。を。行。次。人。の。作法。み。り。を。削。り。外。振。何。公。の。族。
 大名。法。信。の。行。跡。を。さ。ら。と。禁。し。ゆ。多。し。ハ。自。ら。正。道。を。復。し。皆。篤。實。と。改。
 たり。され。我。ね。と。ろ。れ。風。俗。齊。淳。厚。靜。溢。の。世。と。な。り。に。る。お。軍。より。教。を
 既。ハ。世。を。継。多。し。天。下。の。政。道。を。執。行。り。せ。多。し。及。ハ。鎌。倉。の。左。近。將。氏。之。
 遠。祖。此。事。を。受。世。々。人。も。な。り。ハ。法。師。を。し。て。お。軍。職。と。な。ま。し。と。是。何。の。及。び。も。
 各。京。都。お。軍。家。終。ん。と。せ。ハ。鎌。倉。より。これ。を。継。と。上。祖。尊。氏。之。定。め。多。し。ハ。中。
 あり。小。と。深。く。怨。み。憤。り。これ。より。京。都。を。背。く。も。萌。多。し。ハ。後。住。持。基。氏。公。
 逝去。の。後。送。言。ま。し。り。て。氏。満。法。兼。持。氏。ま。で。多。し。ハ。京。都。の。ほ。り。元。服。志。
 多。し。ハ。お。軍。家。の。口。傳。の。一。字。を。揚。多。し。り。し。ハ。這。回。村。氏。之。ハ。痛。男。賢。王。丸。殿。

元服の沙汰ありし。持氏は京都を背く。意頗るなれば。世々の例より。古八幡を即我家の佳例と仰せんと。鶴岡八幡宮の正室を。賢王丸との初冠せし。我久と名号す。ひたり。執行家牧安房。憲実を。大まは。警。俄。は。正。の。持。氏。と。名。を。清。く。し。て。元。弘。建。武。の。乱。を。静。め。天。下。を。一。統。し。ひ。お。軍。家。を。京。都。に。お。も。て。君。臣。守。護。し。ま。し。五。畿。七。道。を。治。め。り。お。國。を。一。邊。都。中。に。王。化。も。届。け。し。治。め。し。ま。し。昇。平。を。長。よ。う。し。ま。し。討。滅。し。ま。れ。代。り。其。後。を。失。じ。て。源。家。の。嫡。男。を。京。都。に。上。し。お。軍。家。を。鳥。羽。子。親。に。一。字。を。賜。ふ。り。然。る。に。今。君。先。規。の。佳。例。を。廢。し。權。は。賢。王。九。殿。に。傳。へ。八。幡。宮。の。正。室。に。申。し。て。元。服。の。じ。め。の。名。を。自。ら。付。す。と。し。ま。し。これ。何。の。所。為。と。し。や。京。海。念。の。

親子の中。此度の半お軍家。おて。や。い。ま。の。商。賣。の。は。為。る。か。か。い。で。忽。ち。中。に。お。和。ら。り。世。の。乱。も。及。ん。ぬ。定。む。當。時。の。お。軍。家。の。存。す。れ。角。す。れ。は。先。代。の。定。め。お。れ。け。る。の。制。君。の。は。代。り。お。賣。易。ゆ。ん。と。以。の。外。乃。急。ぎ。先。非。を。改。め。あ。り。て。若。君。を。取。て。京。都。に。上。し。ま。し。元。服。の。名。を。商。賣。の。家。へ。万。民。の。救。ひ。と。し。ま。し。お。過。る。と。し。ま。し。と。尚。ま。く。の。名。を。陳。れ。陳。め。り。お。れ。と。左。馬。の。名。を。取。り。も。兼。じ。お。り。と。し。ま。し。憲。実。を。疎。れ。お。は。し。と。し。ま。し。も。え。者。と。し。ま。し。か。か。い。ま。の。お。安。房。守。護。會。の。居。る。と。し。ま。し。永。三。十。二。年。八。月。十。四。日。山。の。内。に。鼓。を。退。き。お。領。上。野。園。自。井。と。し。ま。し。移。り。し。一。族。な。り。お。れ。扇。谷。の。家。政。治。給。お。痛。打。定。り。子。が。お。救。護。士。と。し。ま。し。お。同。じ。な。り。今。憲。光。の。孫。男。憲。信。の。外。永。井。と。し。ま。し。前。入。道。那。須。と。し。ま。し。小山。田。小。四。郎。か。ん。ど。の。人。の。跡。を。慕。ひ。上。州。自。井。小。行。加。り。左。馬。殿。と。し。ま。し。



神子祈りて
領
君に儲
庄

いふ怒りまふと一色詮秀討こそ終る言詰を巧まふ津言いふ
 左う久後怒りに堪へ此上の憲実を誅せんと俄に関東の法は觸る
 軍勢を召しあはせ結城六郎持朝へ前年持氏公の馬色と世あり
 正領結城は蟄居してありける。今度の召召の教に入ぬこゝゆるも是非を
 知る程と君の命垂るればあはれと權代恩顧の郎党を引候。一色は源
 小走ありてはもて持氏は斜まると喜び多し心だらん事をかん免りありて
 今回の一件を語りまふ持朝下めて是れ知り大に驚たこもまゝ一色
 助中知よと稽されし誂とぞ思ひし君の馬色止りてあはれ光景
 るるぬ人々事々や徳便より後一莊車の火を一杯のあてりて消入とぞ
 とも何ぞよく遊むとをばれた我一人の力に以てんかすしに直棧舎も
 あはれぬとていふやうあはれと君の命にまじりて斯て関東の法は觸る
 只不知の隨ひ走る事とする軍勢近日甚しき事やぞ鎌倉中々満くあり
 左うの殿これを出候し存ひお伺とて限りありまらん家奴を討ら
 べと一色詮秀同村家と先年の大ねに三千餘騎をこゝ上州へしむけ
 多しおんとも五千餘騎を率へ鎌倉を打ち武井高安寺小陳とりまふ
 安房吉此より来て大に驚た嘆息し天下の大名家の安否今このよふ
 極まれば此上の力にじて早馬をまき京都も折るれは軍家騒々せむ
 俄に領老臣の人とを召して評定ありお區々かして一変せんと村多斯波
 左に備督我陣班をあくるまの各の中はあはれ知渾一にわれと熟く思惟
 こそ毎今君代を知るもその始めて諸侯の心服も争はれをみるは起す
 乱世討より奔らん某がなるとこの法候の命せと駆迫の法士の中は
 るき人を撰ひこれを大將軍に選まの兵をつけて必殺を敢やめ又別は道智

今君代を知るもその始めて諸侯の心服も争はれをみるは起す
 乱世討より奔らん某がなるとこの法候の命せと駆迫の法士の中は
 るき人を撰ひこれを大將軍に選まの兵をつけて必殺を敢やめ又別は道智

のちちたるるわりのことして護念を下し多岐氏と親諭し和睦を整ふし
 まらんて万全の計ありとてと悼る短く速く六君公に比徳臣此後終る
 べきに評議を置きよき事なりとて維とて大ねと家校を救んとありと終る古
 家校程秀次男中務大輔お房の前年父輝秀亡びて右京がよあり
 お軍家の作道相お房仕りければ今夜の評議を置きよき事なりとて何て
 左の評議の正しく父程秀が御意敬ふておとすを何とて前年守りて御意
 教胡の五人前ねお房の仕内を置きと家校を救ひてと奉と果てと刺え
 護念の父を救りて西領を置き放されり身おんがもを置きていふ
 又とての僕ゆるりせと今日までおとすを置き云甲斐々々しく入て世の
 乱を置かり思ひ忍びていふ今護念の光景京都を移き置きやと置
 私よ必りる實事らん君必り救護念を救ひまらんて其おを置き置りていふ

才不肖なりとていふも一回護念を對ひて矢又及り父を對し孝あり
 且護念の一家を救ふを我は是彼ののゆほふゆわれは海を
 我よりいへる速く近かり護代奮好の輩を招き置り若干の軍勢もいへる
 其勢ひを將て家校を救ひ父入道が泉下の憤りを暗しやたしと置
 お軍家も其王位を憐れおしは父へる護念の政道始終正しと終る
 國中の諸國穩中も今既は乱邦とてなりさしと速く勢を置き
 お房を討てその罪を犯さんと想へて我世に治りの始ふりてみり軍勢
 配さんと然るるをいふてや南のりのことしてお房を救んとするおを
 仍とてお房をいふるが汝も清りのお房を置き置りていふとて
 一勇の力なりて護念を傾えんは東はしな家校を救ふをいふとていふ
 若國東の諸お持氏を叛れよ力するのめら其めら速く護念を亡し

宿志を遂よと蜜は旗の教書とて賜じくお坊房かきりなくしはひ
ふく君恩を感佩しき心家還りて只顧園をたの準備せりこ
小栗助平の皆く洛外八塩山の辺に忍び居りしが関東の乱は
家次お房の軍家の内を直して憲実を救はしむるもゆてその
便宜を索りて近の天下早して加茂川の流も涸るるなり
洛中洛外の井悉く涸るる小栗の旅館の裏に一の古井あり常水
盤のぶく涸りて其深さ斗さじも然れども此井の神あはば云く
汲となぐてありが今早魁の付されども水尚温るるなり近隣より
汲とりの多しされども人くを汲故も温るるものなりし一日乃夕
小栗夫婦流るる旅宿の前裁お出く垣の外面をららるる隣家の婢女
水を汲んじ彼井お珍まみらるる何をうんん水汲まて井の紅を
何もととと高らるるお忽ち牙を齧りて井中墜入り夫婦お驚
味お近隣らら集ひて助んとされども及らざる死をば井を
汲干んと終日人力をせせと水涸れぬ斯るごと三日お至れども
減せざれば人く恐怖し此井お神の在を知らざるみづりお汲
斯る外を稟しなると死をばんと高強く汲は又いつる討て
不如止ぬめとて是より井圍垣を結て人をて井に迫はるる
庄司これを怪しと夫神の人を助るるて崇むる今日天下早し水
患ひ漸近此井の水を汲いぬて祟をなすは必ず神ありは
悪の蛇なると居を止しなると此後怪しぬるをえんお打殺し
除んとこれより日毎彼井の妖を察する両之日をこる夕晚井の垣

年輪二八ぢうりをもこゝろの女の甚美級白後の小袖は緋の袴もははり
居たり。庄司を説き少恥ひいふまゝめて顔は背を風情麗き眸
明珠の如く輝き絳唇白玉を合眉揚柳のきぶ熱き息は芙蓉花
姫と肌と雪お光を添ふごとく腰の紐を束はし似たり雲間をたはし
月より尚美しく蓬萊宮裏の神女あはせらるる瑤臺月下の仙娥天降る
あやと石心没肝の庄司も恍惚として夏の如く紫衣を着て遊んで
ぞして言無き夢の貪睡も居りしごとく知勇の社まかり早く故を
を収め忽ち惜すて想らく。這的古井の妖精あて形変化して人を欺き
あてあふんせつてめいそめて髪を除去し躍かゝて枝打ちを
うねね火なるを流していせもせ消去す。庄司は憤り。この
うへ此井の底を捜して討たんと志し入るとせし時、日暮やけむを
水中のあやもあはれつた。明且を俟て入らぬのをや夜を止りしを
討つてぬる之念をなげ夜を待たぬ井の方を守り居れば初文
とらふより風雨甚烈しく樹木を倒し屋瓦を飛し雨を盆を傾け流し
霹靂おびししく震ひ閃電白晝の如くも五文の比おひて天雲うつろ
照天の恍惚一人の女性きてる。後とてお記をなすも白後の小袖は
緋の袴もははり。麗き顔は体上着たる思ひひきかへ人さむかを河人をとけり
同く女性魁首て云うとて女の姿は身は馴れしとて鏡の精の前身三別
二村山ゆく美宅の小かざりあはれし武蔵野の澤に少女没命て賊の
を知られ行は賈人は售つておられぬ賈人妻を都に鬻んと此地方もははり
る夫と古井の裏に隠れ入りしね此井昔より毒を任る人とり食ふ。妻
井も遂てより尺願役使して食を命せしむ。彼が命を命せられぬは

と涙は其苦痛を止めて色とりと感。又其賊宝を盗んで
 騙し人を欺え溺れ入る。毒物の食やその供を然る内の人池庄司
 助長昨日井の辺にまじりてその知らばて例の色とりと欺えとせし知勇の
 助長妻と好くと借し一刀の下に殺んとせし其驚れは逃失けしを助長
 思ふに思ひ井へ入る。好勝を殺入ると毒龍を更威を恐怖し。昨夜
 俄に此地方を去る。其行を知らざるもあわく妻辛苦を脱し。爾れ
 腥穢な場を今井中毒移居せられ少く入力を用ひ。忽ち水涸れん
 ず。井中の苦み脱し。昔の如く君の左右に侍らむ。其恩を
 報ひはぬとせんと云。終つてまよと想ひ愕然として睡醒する。され楠柯の
 一夢なれば。姫と奇異のものを。助長が如くと告る。其不安を庄司
 を。妻の夢中のその事をも詳ふ。庄司井の傍中。美人を
 入る。今日井の妹を討んと志のほどを速く。照天姫乃
 妾中の昔も恰も符合なり。此上の疑ある。あつた。即ち堂の入り
 命せ。井をあが。しつ。忽ち水涸れ。中を捜すと。小樽の婢女の屍
 の。其外白骨豊。その。是等のものを除く。尚底に至る。一箇の古鏡を
 び。泥まみれ。形が定まる。熟く濯洗して。照天姫前
 小。八枚の鏡。その。限り。一匣。秘めたる。
 此の。や。口。將軍。及。近日の
 早。君。高僧。勅。あり。
 西の。其。古井の。出現。一夜の。暴。小
 枯。苗再生。萬井水。加。川。流。入。天。下。の。喜。ひ。は。
 老。人。旅。人。古。鏡。何。の。縁。由。あ。る。と。入。は。



云鏡の
 精
 夢
 照天
 見
 井中の
 苦
 所

鏡持
 照天
 見
 井中の
 苦
 所

照天

鏡持

小栗卷之十四

園人とあつて命ありははに付知る者あつて進まなくやなれり。鏡のこころ
 存えり。孫と旅人とやまの前年鎌倉屋のぬき亡ひ小栗孫次郎はまが
 男児小次郎助主とやりのうらば。取り及びゆとやと小我教と宜とて
 さして小栗と有つるは彼がこゝの豫て及びふその勇の勇のさう万夫の
 従者十人を保て七強を窺ふはしと幸あるは此老とて持房小栗と
 家板を救ふは必死切次做へ。さぐる身れと。持房と命もふは遊界ぬ
 領賞一徑は小栗が旅宿に至り。案内を乞く對面。此徒の旨と述ぢ且と
 小栗の怨ふ所の幸とて大に喜び持房は宿志の宿を生かすへ妻郎堂小栗の
 ほども語の知れし八稜の鏡を携へ持房とち連て柳營へこそ急ぐれ。

第九五編

窮士發達して東國を赴く
 癡老慙愧して佛門に入信

且脱持房は小栗をわく柳營へ上りてとて上へ上へ速く人悉せしむ。
 骨柄を以て涙を流し威儀嚴然として進退節中り顔色温潤とて。
 英雄の相あれば軍家いと喜びおぼしき。其の付持房助重が宿志の宿を
 入へおび。彼古鏡を上後入るれば義教公勤くと蘭とて語りて命をばら。
 波助等何等の故とて此鏡をば志持とて其由ある處をお語れし。
 ある助等謹で名武の家の長室よりを寫光模死の后照天小侍り。
 三列ふして鏡を小女は支武を計とて小女に付鏡の所在を知らし。
 たりし。八陸山古井の毒龍の怪鏡の精多中の告にり再び鏡とて
 其の要を痛くへ上りて夫婦が奇偶孝公貞烈の行を感し。
 宣つとやうに此鏡は昔唐の天竺軍中揚州の参軍李守泰より水心鏡
 一面を奪ふとて清室あると目と輝と鏡背に盤龍と繪する勢を助

ところろど。玄宗帝敷鏡のつて甚異。と李守恭小同。うら別ら勅答
 志はる。此鏡ハ揚州。呂暉と。鏡匠のゆ。一日鏡ハ漆人。世。付。白衣を
 多。られ。老翁。夏衣を。着。る。童を。供。して。呂暉。が。許。す。ある。や。さ。る。髪。鬚
 悉く。白く。眉。垂。く。肩。至。る。自ら。名。告。ぐ。い。我。性。ハ。龍。を。護。し。て。こ。こ。
 付。の。童子。ハ。玄冥。と。呼。ぶ。我。真。龍。鏡。を。造。る。こ。を。詔。り。今。汝。が。こ。こ。ハ。
 これ。を。造。て。帝。の。意。ハ。慍。人。と。也。此。如。を。去。る。べ。と。戸。外。ハ。牛。一。小。童。玄。冥。と。こ。も。よ。
 爐。亦。入。り。戸。を。扃。居。々。と。三日。出。て。戸。を。開。き。り。呂暉。打。入。り。こ。こ。ハ。於。渡。
 玄冥。が。所。在。ナ。只。瀕。の。前。一。紙。の。書。あり。あ。れ。を。開。く。曰。開。元。皇。帝。聖。
 通。神。靈。五。帝。逐。降。社。可。辟。衆。邪。鑿。萬。物。泰。皇。之。鏡。無。以。加。焉。歌。曰。
 盤。龍。々々。隱。於。鏡。中。分。野。有。象。變化。無。窮。興。雲。吐。霧。行。雨。生。風。
 上。清。仙。子。來。獻。聖。聰。呂暉。結。早。之。爐。を。移。して。五月。五日。揚。子。江。心。ハ。
 ち。ぬ。く。漆。ら。ぶ。の。ゆ。と。使。へ。わ。げ。ハ。帝。を。び。ひ。こ。こ。を。長。住。と。し。身。ハ。甚。後。
 天下。旱。の。耐。水。心。鏡。と。疑。陰。殿。ハ。安置。一。雨。を。祈。る。須。臾。中。七。甘。雨。大。
 小。謝。ハ。帝。これ。より。ま。さ。こ。此。鏡。を。愛。め。ひ。い。が。こ。こ。後。水。心。鏡。ハ。感。て。一。面。
 の。鏡。を。造。り。愛。妃。揚。貴。妃。ハ。賜。ひ。ら。此。鏡。を。う。その。け。ち。安。祿。山。の。乱。中。
 揚。貴。妃。馬。塊。の。露。上。消。一。村。此。鏡。の。所。在。と。知。ら。ざ。り。ぬ。そ。且。ま。り。遙。の。星。
 霜。を。狩。り。我。國。ハ。泊。来。し。平。政。子。これ。を。得。く。秘。藏。あり。し。と。言。ふ。今。こ。こ。ハ。
 こ。こ。の。不。思。議。さ。よ。近。日。の。大。旱。に。高。僧。の。祈。り。甲。斐。さ。り。り。此。鏡。の。故。り。
 とう。甘。雨。降。り。て。民生。の。ま。は。ひ。と。ほ。ほ。れ。ば。真。の。水。心。鏡。ハ。異。る。こ。こ。ハ。雨。と。び。
 天下。再。易。の。室。ナ。り。民。の。父母。々々。の。持。を。た。よ。且。と。汝。妻。孝。の。ゆ。ゆ。
 我。を。放。り。其。去。向。を。知。ら。ば。こ。こ。ハ。再。び。子。故。に。復。る。及。び。こ。こ。の。宿。志。ハ。
 遂。さ。こ。こ。大。々。と。ね。ね。靈。鏡。な。れ。我。こ。こ。を。信。じ。る。こ。も。又。故。あり。こ。の。

故に復るべしと思ひて還りしものも承く宝に麻界と云ふと。又
 汝が如く道理のねは坊房と傳ふ東國への。憲実を救ふを一切の
 おあての尚賞あるべしと太刀馬と賜りし。小栗年子の宿志一討するの
 一門他家の面目此上なり。天よまは地お喜び感謝の候せられぬ。海所を
 我出たり。かてたれは家牧治經大捕坊房と東國を奔向せんと。小栗助平と
 僧侶々々助重の此序なり。横山安秀と討つ。男の仇をも報らんと
 想ふ妻をも俱せん。と云ふ陳中へ。友伴けんことあらんと案がはひる
 折らら美堂小三郎ま柳を誘引く。八塔山の旅敵も事りたれば。大みはび
 急死對面を小三郎夫婦恙かたを飲ひ祝し。后おのれは。濃もしく
 後世のち東國の方と志ざり。下給ふ至り賊果お宿り青柳もめり。舎
 そのの上と云ふ。あまは俱して熊野山せし。や主君は。夫婦を

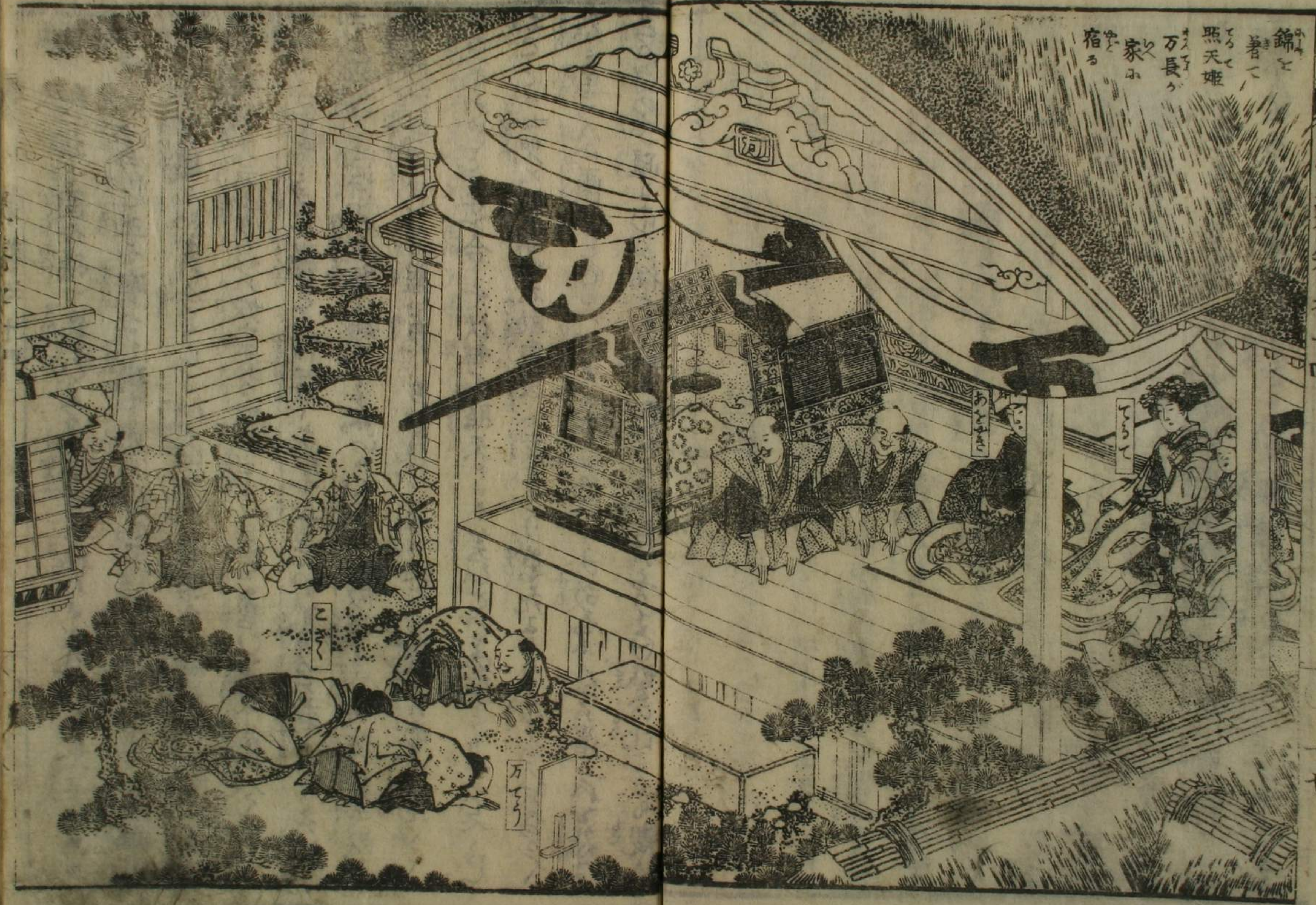
このあ朋輩の入り京師中上のまやと云ふ。昨日京よ出され。何方おたし。なと
 知ると。公若くは。いふ。京初童の口順く。末世といふ。類あり。小栗殿と
 けへ。その内の人。小庄司と申す。ひつる。漢子の勇猛。八塔の山。井は。修
 毒移心と。逃去と。一夜の大。雨。その日。ひさし。も。患ひ。早。魍の。苦。惱。を
 免れ。びりし。と。庄司の。勇。威。お。ろ。ろ。と。然。る。小。此。夜。徳。念。及。は。速。報。の
 けへ。ゆ。び。世。の。乱。と。ね。へ。う。浮。じ。が。彼。小。栗。の。の。奔。連。と。鎌。倉。討。ち。の。勢
 お加り。近日。東。國。へ。奔。行。の。と。ま。げ。ん。庄。司。も。俱。し。り。人。毒。龍。と。も
 恐れ。勇。の。必。を。軍。お。ち。勝。世。の。中。静。謐。お。な。り。お。ん。さ。ご。い。お。ん。さ。ご。い
 驚く。さ。と。そ。世。の。ま。あ。ね。と。詳。は。ま。へ。上。り。お。助。を。ま。婦。と。賊。塞。を
 平。げ。小。三。郎。の。奇。功。を。感。賞。し。て。后。助。重。函。嶺。の。奇。難。の。討。ち。思。藏。も
 照。天。小。介。を。還。會。武。藏。討。ち。す。て。ま。は。る。処。は。一。色。横。山。お。出。會。小。介。の。王。を

落さんとして討死し。照天を夫と負ひて僅に脱ぎて。孫次の上人は還る。
 教中も、助言を坐行車かきまゝして熊野の本宮の湯に入て病平愈の
 こと。九人の郎党も、子守りまよりの京師へ出池庄司が勇威ゆゑ、八稜の鏡
 再びひらくること。又鏡の奇特も、將軍家ゆゑ、御免を蒙り、お房と
 俱へ、東國へ赴くこと。母至るまで語りたまふ。小吉郎の伯父の死を嘆れ、主の
 高運をよると、び庄司が勇鏡の奇特と感づかれ、斯く、后青柳を照天
 姫ふむひて、云へり、はな妻を墓にあり、お房も、お吉郎は、はなと
 此身の上、知らざれば、お吉郎の限り、たゞ、はなは今とあり、其罪逃さず、
 お吉郎は、お前より、あつても、畏く、清も入ら、お吉郎は、お父の仇人、横山を、
 さらし、お吉郎は、お父を、蒙り、し、尚其上の怨、お吉郎は、お吉郎は、
 恨し、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、
 一、太刀忍び、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、
 願ひ、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、
 赤心、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、
 憐れ、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、
 小四郎、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、
 受、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、
 と、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、
 の、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、
 ぞ、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、
 や、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、
 う、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、お吉郎は、

ありけるが青柳おんも侍り行んとしあてて幸なれ我軍陣の殿より
 彼を候しとあるに横山を討て至るべ我勢をりて加勢せん強くおをせ
 よといふ照天さうもいれを青柳さう喜びて小栗が好意を感佩
 せり斯く小栗助重を發行の日もさうり美しく粧ひ拵房と作
 京都を出東園さうてそつとこれより前片岡土如次郎の主君の命を
 受てて心も下総まで走り豫て熟しひ約する。徳代恩顧の老るるの
 赴を告ぐれば人々大まふ喜びいでや出陣の竹をせんとして我もくと登
 夜風分を走上るはども近江土番場の驛より助重は行遣り其
 人々を岩津孫四郎長勝形原又七郎忠之竹荅ふ市忠次が浪津備
 重治三助次と郎守躬赤を止めして都合二百余人なり小栗とあ
 人々風流と龍の羽興を生せるがごとく威風凛々としてひりたれば足と見
 りの天晴の勇ねも感せぬりのこそさうりひや。あま音墓の驛にたれ
 万長へ這回鎌倉の討手じ家枝お房小栗助重のあね東山をさる
 処は今日小栗が宿れものか家々々と豫て縣守より命あつた馬を
 仇をいさぐる小栗あねの禍を身あからんと戦き恐は慌忙と妻の小笹
 諫めたる小栗とこのこと尋ねたる人々と前ふ云一の今日のめくるま
 とどくあり。そと難面なり多人が今さう悔めども甲斐はし爾あねかの
 人の義を辛く介もつ奴家流まるるるこのあり。その奈何とかなる小栗
 との復初らるる一旦女婿となしけるさ入めり正妻照天姫とてか家の
 襲婦とありて居りつればこれらのことを以て嘆きやうさういふは
 へんあまうよを恨しゆいそと肩ひ折る下婢暴然走すあ
 さても不思議のことゆそや去年去るるに音柳只今彼あねの

五八

見入しとすゆいふ小笹その不安きまてうねと云はるまゝ外方と云ふ
 よりのけりある女肩輿を昇居多くの供へこれを囲ひて居りし人
 ぞと顔はうち青柳慌忙に云はるて云はる内君別を申しして后絶く
 内音同も影くさりし今恙あらぬ光景をみてしつたりの存せり
 妻がこそさそ怒りしあへ。これ後々妻が意よあふと早よつて妻の
 物持のゆがそのゆがく笑へまぬせんはしあつりて居る今主とおひ人の
 京都より吾妻お赴けのあつらふ今夜の宿は此家おと命をへるまはる
 こころよく羨しとあへといふ小笹は今夜助重の我家に宿るふ定めあれが
 他人を宿さるはせりうらむに青柳うち對ひく云へりたれおてが
 身の上の事なまらちまね今夜の宿は素まらぬ方へ小栗殿の宿は
 を知りてのさゆらふ。又知るての事ゆめ何れ今宵の宿は伯とあるい
 中ほじあてとがふも同れんと思ふと今方方のゆめゆめ其順備を
 いと聞。今何方お居るぞ其事心と聞へてとらふ青柳さん
 吾妻は居て京師の上りま。吾妻踏まらるるなれ研を定まらむかじ
 これらのゆめゆめへんおまげて今夜の宿をとりお付小笹はさ又園弁のさ
 白痴お今いさぐ小栗との宿りも他人を一人きりとも泊かに彼を
 方をゆる思ふ鎌倉討手のゆえおり不れおてもあるあふ。しつらる答を
 京人も知はしとらお付肩輿の裡よりてりゆれ口を受もる奴家おお入云
 解んと戸をおひひらき出る小笹の驚れこれを見るお桃李却て妬み芙蓉恥
 を含む怒りま。静くとま出。女を威あつて猛うらむ武おの内君。さ
 をたてられぬものゆめ平伏させお付女性の青柳お命。小笹を助け記さぬ
 又忘れぬあはるそのゆめ此家ありし豊婦の小笹とるを知らるやといふ



錦
著
照天姫
万長
家
宿

小栗卷之十四

こさく

万長

十七

小並、竹然と面を揚て窺ひ見る。昔ある位ねさぬあざら見えのあ
 面さ、いふ多し、玉を磨るが、斯やあらんとおのほく、小菟さりと知り
 ほど、其威おそれ合さし、何といふべき言語、胸裏に長み居る
 その射照天云出、おの奴家、射も主との、養ひて受、恩人といふ
 れ、さやとを、瀧、慌忙、これを止めていひ出さる、前日のこと、知
 さ、詮、今日、既、知、さ、い、て、を、做、け、ん、願、く、の、妾、夫、好
 難、面、は、な、も、じ、る、罪、を、免、し、ひ、ま、い、こ、れ、よ、上、と、は、恩、の、あ、じ、た、ぐ
 免、れ、し、と、を、合、て、伏、拜、し、照、天、の、ち、ま、ひ、こ、の、生、の、実、と、も、さ、さ、さ、じ
 お、こ、ら、女、児、の、奴、家、由、助、重、の、女、遠、さ、り、也、死、な、り、と、な、つ、れ、が、あ、く
 死、思、い、ん、小、爾、と、い、ひ、我、夫、の、勢、と、恐、れ、の、故、あ、ん、ん、置、れ、と、怨、ま
 目、ん、の、の、疏、は、あ、る、程、も、殿、奴、家、が、妹、背、た、り、と、は、恨、の、比、の、も、親、と
 親、の、許、し、次、に、結、ひ、お、れ、る、赤、繩、つ、づ、不、圓、友、家、の、乱、あ、り、夫、政、別、て
 所在、を、知、る、と、互、に、直、愛、と、思、ひ、い、今、又、故、母、復、を、し、神、や、仏、の、憐、み、て、お
 ころ、り、せ、り、め、ら、ぬ、不、義、婦、行、を、さ、り、の、皇、天、い、う、く、恵、め、り、ん、あ、れ、ら、を
 ま、も、不、美、あ、ぬ、り、我、精、一、と、怨、み、ぞ、ん、そ、ス、う、俱、一、たり、青、柳、の、を、は、這、渡、こ、こ
 始、終、を、物、語、折、り、主、万、長、二、室、の、裡、と、持、び、出、始、終、の、と、は、渾、身、ぬ、い、て、お、ん、を、怨、ま
 さん、今、さ、思、は、浅、摺、や、か、る、賤、き、生、言、と、も、い、心、も、拙、て、只、利、の、と、思、は、ぬ、と、い、ふ
 あ、ら、貴、人、が、下、婢、に、追、役、使、つ、る、冥、罰、あ、て、我、女、児、を、慈、お、死、す、あ、ら、い、
 是、も、何、由、と、い、ふ、欲、より、及、ぬ、人、を、女、婿、に、し、て、未、の、栄、利、又、ん、の、と、お、り、ひ
 け、は、欲、公、の、做、事、な、れ、る、さ、く、お、怨、ま、我、の、あ、り、の、を、世、も、人、も、死、心
 は、の、い、う、母、我、妻、と、い、ふ、想、り、さ、や、と、い、ひ、か、つ、ら、小、毎、ま、と、い、ふ、爾、の、先、非、が
 悔、く、健、言、も、悔、く、ま、い、今、より、て、夫、婦、法、も、容、顔、を、か、前、さ、ら、せ、世

女児が菩提且我ら此年以作り罪を亡くして後世のいともみなきを
 して万長をばつれ我らか後其のわれもあつる胸中いふあつると想
 きや覺れた心あつるべしとあつて候しつてもさうと夫婦先非を悔恨
 公認し菩提の道入りぬる情も又かじられ斯うとも母表のうこ
 賑やく小栗判官代の出入と里長おの立纏ぐ照天姫いふあつる夫
 まら今日徳倉討手のゆ大おんその入らせりあつるお斯く居らんを
 れま公の使へも畏とれが奴家の別室あつて後刺時を窺ひ夫言ふ
 おしらがるはあつとるしとら小豆のさびて命至極道理なりいさ
 やと前立照天姫と青柳の二人を一室に誘ひたる程もあつせと小栗助
 近習の輩數十人あつて万長が許入りし程の兵と青墓の彈
 のうちそれの家あ宿らたりとあつた程いと刑りり各々知をばつて
 漸く静すりあつる時助重侍臣の命主と信ひあつる
 万長これをばつてこの前の報をせん為るらん今んをやいふる夏目
 お達女らんと地獄の餓鬼が燔王のほあ小栗はくくわて牽つてらさく
 廣をよおそくも踏踏小栗これを違れりやいふ万長は亡し我
 今夜こふ宿つて汝罪をばつる今我らとらよ云解こつてせ
 其罪を免と汝利欲あ違つたのあま照天とばつて智婦おせん
 と照天節を失つと法と命に随つてこれをばつて謀をりうけ雨
 嬰婦は下り日毎七竈の火を焚く七荷の水汲く七竈の草を摘
 七桶の草汲りませり是一人の力あつてよく及ぶ処あつるやとあつるその
 弁がたれを知り其任堪えを罪と強く倡婦おせんあつる照天の
 観世音の仏力あつてはしも做らざる業を弁せりあつた凡たつてと

不慮と云く其方小處とて思拙とや云ん暴悪とや云んかる非道と
 行ふと豈照天のさうらん尚幾人々斯ははらん曾てまこ我世忍び
 居し時不圖と云事りしを女児を壺に溺れ我をりて女壻せんと強
 らるりあを辞まが禍忽ち身及び宿志を果と妨らんと權
 するははりしよりかひて我身の素性を措けし辞をりて非道
 行ひ人をく不義に墜せしより是此不仁不義の其罪正母死小
 色りと既方長が罪を正まうてくこれ後背の紙門やお困
 我まをじ付多と云はくおをららえねる妻の照天青柳と小世
 借ひ物なれり小栗河のさひひびざる我妻やおん身を殿よりお
 へきを此亦まらひを身まらふと回つ照天府よりけは命は
 此殿おはきをまらひを昨日人のしをまは明日の殿とのまら宿

しさんともほをむ精をれは夫婦助けのまをてく俄も身を
 殿の前より此が宿の最若主夫婦おも對面して夫婦の若赤
 ちとをまらふおいと殊勝おも憐るまが殿おんく長夫婦が余
 ひきして此神と云ふ及べりてまは小栗言語を正し怨をぬき
 仇人を助るとかどうて心を怒りて妻の心れをぬきぬきをりて死
 報ひ徳をりて徳報由と本文おもとくは危難が須賈むい
 孫秀が石崇潘岳を報ひつたこれ世を以てせり我又直き
 するがてり止めりも照天微笑をえり命實は道理あれと主
 を罪つた奴家おわたる忍びざる縁故のここの權も主と
 受し恩はさうり又奴家長が許し居るはいつて君も再命せん此恩

二つあり又女兒花見奴家と怨みて死亡し。爾日とて母の奴家とて
 鎌倉どのへ上女兒が仇を報くべきと爾日とてはる是此の思
 あり。それとてあはは長夫婦とてかへん意あれ。此等のこととて憐れ思
 夫婦を免させり。夫は韓安國が獄史と免し。文滯公が臺勅と怨み
 する人渾とれを賢くして今君奔達門出。此夫婦のものを助る。この
 寛仁を何く分招る。人帰伏せ強く夫婦と罪をひらけ。奴家一旦の
 恩は是母代とて思ひこみて速に助重御中落し。さるるの思へ
 多ありの我意を遂へ。僻とてさるる夫婦を罪に免し。さるる長夫婦
 今我の事をも善れ妻の僕もあつても道理ある自ら前非を悔。佛道
 志とてうれおられ。其罪を免さし。さるる佛所に入。女兒が後世と
 母も是を作り悪業の消滅を祈へ。さるる長夫婦もさるる照天

青柳も喜ひの感納せり。さても小栗はその翌日青墓を去り鎌倉
 赴け。照天も青柳を恨み長夫婦と怨を別ら。夫の殿を慕ひ出たり。長
 夫婦は小栗お約束せり。かく眷属財宝を捨て。長津の衣もさるる。諸家の
 霊場を巡れ。女兒が菩提且つ又その後の後世の管の外又他へゆり。さ
 悪く強ゆる善もほろ。手を打て道心堅固の知識とて。終小大往生を遂
 へ。人且流小栗助手。旧悪をさるる。長夫婦を免せり。寛仁大度の大
 こ。世に並。仁恵の慕ひ。旗下池。勢をく。勇威破竹の
 や。奈困の諸候。小差系信。政康。今川上。総介。范忠。武田。即
 信重朝倉小太郎。教景。亦を始。決。軍勢三万五千。余。結。軍家の
 下。家。村。房。小栗助重。は。属。既。五。余。諸
 小。及。中。騷。動。京。勢。只。今。責。入。俗。男。女。上。下。

けて互に資財雜物を西に運び東に隠し南北に走迷ひ女童の泣けり
 若も満小路をふまへり左馬路敷出陣の笛の吹よま然つる武士の
 たりしほどよと連て初まわらせ女房達をばて候とぞい存方あり只一ふ
 みは集ひて音小唄秋の虫あふて頼ひ草葉も志捨て弱り果るをあら
 警へん方もさうりけりかたわれの家枚憲実の討ちを對ひ一色式部浦詮秀
 同形も浦宗の属する軍兵三千餘渡りし司ゆう落らせん五人家子
 郎等僅か七十余騎もあはれ此小勢もあはれと持氏の陣
 少と絶ある持氏もあはれいよくか居臆病りの味方ありて足すといひ落
 ころこそ宜れぬ宣されと秋の夕晚の風吹散され紅葉ふも揃も枝も同
 かくるる哀とあふたふれたる斯てい漁倉のふもあはれは武士の心
 高安寺の陣を門拂ひ溢るるも還りまひる世附もて結城持綱の勢
 一人も散まると忠我もあはれとて入られ持氏も頼りく思ひ密もあはれ
 我武運足すととこそわはれぬ身も替り命も代らんと契り人をも附運と實
 自家の安危を慮り京軍の心をばし退りのすやて八九はあはれ女志氣
 改めと傾運の我も忠義とてとて娘もあはれ其忠心をて頼べき一ひあり今
 楚歩を唱めり附に至り了勅の軍とて雜人の手に入る屍の上の恥辱あはれ
 潔く自室せへとと汝の我子義久と俱く何処もま忍び耐の至と俟て世に在
 まめよ是も最期のおれとは涙よとれと命も持朝言活を正しこ甲斐なれ命
 をあはれぬのうぬいこの命と縮まらぬのあらん某始よりあはれ存せんとは楚の
 のん限りの我言の誠のつねを惜し今日まで一言もあはれ上を抑此回の乱の
 起り一色詮秀も枚憲実を渡り君を怒りしあはれまは依國の患と成
 けり速か一色詮秀も枚憲実を渡り君を怒りしあはれまは依國の患と成
 けり速か一色詮秀も枚憲実を渡り君を怒りしあはれまは依國の患と成

水魚の中とるる人必定て喜し這回の討きに小栗助重よりありぬこれ
 前年の勤王を討りし小栗満重が男見之君の近習ふひ一者るれは
 召りてらん彼の孝子ゆて父はまきの北の君の心より発しよめは一色は言
 お依りてと詮秀を討んむあまふ小艱苦勞心して將軍家の免を
 討んぬ某の使を討り助重を陣まき詮秀は勤王の事を速君の赤を
 語りぬら喜んで京鎌倉の和睦を整一国家安全に討ひて
 尚一色は悪事をせえぬは持氏とて一色は悪行を思ふ
 後悔のめんま色せふ

小栗外傳卷之十四畢

北邱芳

明治十八年記之

と氣をせせし見ゆる人
 中より一粟の花
 萬葉や見ゆ何げ
 かしこく又心とつ

見讀先生中

徳茂甲斐太良

